

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2392700031		
法人名	社会福祉法人愛燦会		
事業所名	グループホーム長寿の家 (ふじユニット)		
所在地	愛知県津島市江西町4-148		
自己評価作成日	平成26年2月10日	評価結果市町村受理日	平成26年5月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kainkensaku.jp/23/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kiban=true&livingsvcCd=2392700031-00&PrefCd=23&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 ユニバーサルリンク		
所在地	愛知県名古屋守山区森孝3-1010 サクラハウス1F		
訪問調査日	平成26年2月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご入居者に、不安なく楽しく過ごして頂けるように、職員同士話し合って季節の行事などを企画している。誕生日の当日にユニットごとと一緒に誕生祝いをしたり、毎月ユニット単位で外出に出かけたりする他、津島神社への初詣や、天王川公園での花見や藤祭りといった地元のイベントにも出かけるようにしている。毎年9月には周年祭としてご家族の方を招待してイベント(一年間のスライドショーや、職員の出しもの)を開催している。また、身体的、認知能力的にも自立度を維持していくため、ひとりひとりが楽しんで続けられる内容のプランを作り実践する事と、体操を毎日続ける事を取り入れている。毎日の調理はしていないが、準備と後片付けの他、物干しや洗濯物たたみといった家事を職員と一緒にする事で、日常生活自立度の維持を図っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体は愛知県西部を主に、老人介護施設・障害者施設を展開する社会福祉法人である。母体法人の方針で、ほぼ毎月職員の誰かが研修に参加している状況が、運営推進会議で報告されている。開設から三年が経過し、当時のドタバタもやっとおさまって、職員の余裕が入居者の安心につながっている今日この頃だと職員は語る。管理者も余裕が生まれてきて、懸案事項であった、地域・行政・運営推進会議のより良い連携をめざし、日々模索をしている。7.8年前まではどこのグループホームでも見られた、食事の盛り付け・食器洗い、居室の清掃などが、今でも「当たり前のこと」として、入居者の自立を、職員も当たり前のようにサポートしている。施設長はその現状を「このホームが法人最初の試みだったので、それが当たり前だと思って突っ走ってきた」と語り、「これが実現できているのは、職員の理念に沿った尽力のおかげです」と職員を讃えていた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員同士で話し合っ考えた「家族のようなあたたかい家」という合言葉を理念と捉え、玄関と各フロアに掲示し、これを目標に取り組んでいる。	「家族のようなあたたかい家」という理念は昨年度の外部評価により、職員全員で話し合い、新たにホーム理念として作られたものである。その実現イメージとして「太陽のように暖かく、母のようにやさしく」「古くからの友人のように笑顔を引き出す言葉と心のキャッチボール」を掲げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩等で近所の方とお会いする機会にはすすんで挨拶をする。近隣の商店、公共施設(図書館)を利用している。保育園の園児たちとの交流行事、小学校の音楽会の観覧が年に一度ある。市民ボランティアの活用。	散歩時近所との挨拶を心掛けた結果、申し送りノートに「丁寧にあいさつしてください、職員さんがお年寄りに優しく声をかけているのが聞こえて、よい施設だ」とのご近所の声が報告されていた。近隣の保育園・小学校とも交流があり、地域のお祭り・花見などには車いすの人も含めてほぼ全員出かけている。「地域に貢献できる取り組みをしたい」と管理者は考えている。	本部を介しての地域との交流、隣り近所のあいさつ程度で、ホームの地域への浸透はまだ緒に就いたばかりだと管理者は感じている。認知症のプロ集団として、ホームが地域に貢献できるような取組に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所として取り組んでいる事はない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一度開催し、民生委員の方、地区の囁託の方にも参加していただき、現況報告、行事報告(スライドショー)と共に、ご質問やご意見をうかがう時間を設けている。	市介護課職員・地域包括センター職員・民生委員・入居者・家族をメンバーとして今年も6回の開催が確認された。毎回研修内容・行事の報告がされ、行事報告ではプロジェクトにより、入居者が楽しむ様子が、家族にも「わかりやすい」と好評である。会議での発言がきっかけで社会福祉協議会のボランティアを申込み、いまでも訪問・活動してもらっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	制度上の事などの相談に乗っていただいたり、申込者の個別の事例を相談、情報交換する等、協力合っている。取り組みとしては、運営推進会議で話す程度である。	市へは、介護制度の確認・疑問、入居者の様子、待機状況の報告、などを担当者に相談・報告している。開設から三年経ち、職員に落ち着きも出てきて、定期的な連携を図りたいと管理者は考えている。	運営推進会議・認定更新時・介護保険の疑問点の解決以外に、行政との定期的な情報交換はできていない。介護保険者である行政とのより定期的・綿密な連携に期待したい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設当初から身体拘束をしないように、正職員からなるチーム(委員会的役割)を置いたり、研修で題材にしたりしている。玄関の施錠は、時間帯ごとの職員の体制とユニット内の状態に応じて判断して、基本は施錠したままにしない対応をしている。	昨年度の外部評価の指摘を受け、各ユニット・玄関とも、訪問時には解放されていた。職員が手薄になる場合に玄関横の事務室の、事務職の手を借りることがあり、その結果玄関の見守りができなくなった場合のみ施錠をするが、玄関の見守りができるようになると同時に、管理者が開錠する姿が訪問時に確認された。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議の研修や、休憩室の書籍で学べるようにしている。声かけから気を付けて、職員同士で気付いた事は指摘しあえるような内容の研修を、接遇と関連付けて実施した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	入職時の研修で権利擁護と成年後見人制度について説明があるが、事業所で学ぶ機会は設けていない。成年後見人制度を利用している入居者がみえる事を理解している職員もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者が一元的に行っている。締結、解約は直接会って説明し、ご納得いただいた上で行っている。改訂等は文書で説明し、同意をいただく。職員が問い合わせを受けた際は管理者につなぐようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の場でご意見をいただく他、面会時に職員がご意見などを伺ったら、管理者に報告し、内容によっては施設長に報告の上検討し、現場にフィードバックするようにしている。	家族会はないが、家族は入居者とともに運営推進会議に参加している。ホーム便りも年3回の発行が確認された。開設時から季節行事として餅つきを行っているが、入居者にも好評で、いつも「お代わり」の声がある。誤嚥を防ぐために、職員は傍らで注視することを怠らない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は随時個別に相談や意見を受け付けている。職員間でも申し送りなどを利用して意見交換している。内容によっては施設長に報告の上検討する他、職員会議やフロア会議での議題にする。	要介護度4・5の入居者はなく、著しいADL低下はなく、プランも「継続」ばかりだが、ADLが徐々に低下していることは職員も感じている。下肢筋力の衰えに気付いた職員から「歩行器購入」の提案がされたが、対象はその入居者だけであったため、家族に報告し、個人用として歩行器を購入してもらった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に一回以上、職員自身の自己評価に基づいて面接を行っている。シフトでは希望休や希望勤務を極力希望通り取得できるように最大限配慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月、職員会議で1～2題の職員研修を行い、技術と知識の向上に努めている。必要に応じて業務として外部研修への参加ができるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	愛知県グループホーム連絡協議会の会員になり、必要に応じて会の行事や研修に参加できる体制を取っている。同業者の見学に対してもオープンに対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面談で不安や困り事を中心にお聞きして、職員とも事前に情報共有をしている。職員は自己紹介、接遇マナー、傾聴といった手段で本人が安心できるよう努めている。信頼関係を築くため接遇の研修も行った。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族からのニーズも事前に職員に知らせ、入居時の付添や面会でみえた時には、お話を伺い、必要な内容は職員間で共有している。家族に対する接遇の研修も行った。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前の聞き取り内容、本人の様子、ご家族の要望などを職員間で共有できるようにして、ケアマネ、計画作成担当者、管理者も含め話し合えるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活リハビリも意味もあり、一緒に家事業務をしている。また、入居者の現役時の話や知識を話してもらったり、一緒にゲームを楽しんだりしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の希望を伺ったり、意見をいただいたりしながら対応していくようにしている。介護計画はご本人の状態を説明した上で、内容を説明できるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	天王祭り、藤祭りには毎年行っている。希望に応じてなじみの場所や店へ外出できるように支援している。ご家族の意向も伺ってご友人などの面会にもオープンな対応をしている。	年末になると孫にお年玉をあげる算段をするが、孫は遠方に住んでおり、その事情が理解できず、「疎遠になった」と不穏になる入居者を見て、家族に報告したところ、家族から孫へ伝え、孫からホームへ電話してもらったことがある。墓参りを希望する入居者は、家族に伝え、家族が同行して希望をかなえた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	環状に座れるテーブルを使用し、10時と15時と食事の時間は、リビングで一堂に会する。共同作業やゲームなど、交流の機会が持てる対応や、職員が間に入って会話を膨らませるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	こちらから積極的に関わっていく事はないが、本人、家族及び現在サービスを受けている事業所等の求めに応じて対応する。再入所または系列の特養への入所希望には配慮して支援する。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者に対する聞き取りや、普段の会話等から、ひとりひとりの希望を聞き、職員間で共有できるようにしている。訴えの少ない人には、様子を観察して職員からアプローチ出来るよう努めている。	暮らしに関するアセスメント・プラン・診断書・薬の情報は各フロアのスタッフルームに常置し、いつでも確認できるようにしている。体が虚弱なため「自分が疲れて寝込んだりすると職員に悪いから」と、散歩を遠慮する入居者には「そんなこと気にしなくてもいいよ。」と声をかけている。訴え・希望の表出が少ない人には、居室で気の合う職員と二人きりで本音を聞き出す工夫をしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの内容はユニット職員で共有されている。入居後も、本人や家族から見聞きして新たに分かった事は、申し送り等で共有している。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	普段の様子観察、体調管理を通じて把握できるようにしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当者会議、フロア会議を利用して話し合えるようにしている他、都合が付けばご家族にも担当者が直接相談して計画づくりをしている。	職員の気づきは全員に共有され、その中で居室担当者が個々の入居者のプランと現状の乖離に的を絞って書面にし、計画作成担当者・他の職員も交えてカンファレンスを実行している。プランは3か月ごとに見直しされている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録と申し送りを活用して情報共有している。記録では、介護計画のニーズに基づいた内容を特に書くようにしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対応したサービスができるように、サービス内容の変更の他、その場その時に応じた柔軟な対応を行う。遠方に住む孫と話がしたいと言われ、ご家族と調整して電話をしてもらった。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	天王川公園、津島神社、市立図書館などを利用しているが、地域資源としての認識は薄い。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本は同意のもとで囑託医がかかりつけ医になり、定期的な訪問診療を行っている。希望に応じて以前からのかかりつけ医の診療を継続する事も可能である旨、入所前に説明している。	入院前のかかりつけ医の受診は原則ご家族対応だが、ご家族の都合がつかない場合や緊急性の高い場合はホーム職員が通院介助も行う。認知症の専門医の往診が月に1回ある。訪問歯科・精神神経科病院の往診もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	七宝病院の訪問看護師が週一回訪問する時に、一週間の様子や体調を報告し、相談出来るようにしている。情報交換の中からアドバイスをもらい、受診や様子観察に役立っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	基本は家族対応。サマリー提供他、必要に応じて病院と情報交換を行う。家族の求めに応じて、一緒に医師からの説明を受けた事がある。病院関係者との関係作りは行っていない。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所であることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時の重要事項説明において事業所としての方針を説明している。	重度化した場合の対応にかかる指針があり、入居時に説明している。看取りの方は今まではないが、ホームとしては行っていく方針である。看取りを行う際のご家族の仮眠室が用意されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを作成し、職員会議において対応について研修を行っている。また、施設内で救急隊員による救急救命講習を年に1回実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルを作成している。年に2回、入居者も全員参加して防災訓練を実施している。地域との協力体制は現状では築いていない。	日中想定と夜間想定避難訓練が、入居者ほぼ全員参加で行われている。2階の倉庫に非常食・鍋・コンロ・火を起こすもの等の備品が備蓄されている。地域の防災訓練の参加はされていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	その方の自立度や性格にも配慮し、人生の先輩として敬意を払いつつも、親近感を感じられる対応をしている。施設内研修でも題材にしている。	入居者を姓で呼んでいる。トイレ誘導の際ははさりげなくトイレまで連れて行き、他の方に聞こえないようにトイレの前に行ってから具体的な言葉かけを行い人格を尊重している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望を伺ったり、選択できるようにしたり、自己決定出来るような対応をしている。必ずしも希望に添える事はばかりではないが、まず希望を表してもらってお聞きするようになっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたか、希望にそって支援している	全体で日課のペースはあるが、出来る限り一人一人の希望や、その時々々の体調、気分に応じて柔軟に対応している。朝食の時間より起床時間を優先して対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分で出来る方は自由に楽しんでいただき、化粧品等の購入で付添い等援助を行う。そうでない方も着替えを選んでもらったり、身につける物は一緒に買いに行くようになっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備は力とやる気に合わせて役割分担ができています。片づけは自分の分を下膳することが習慣のひとつで、職員も手伝って手分けして食器洗いをする。職員と一緒に食事する機会が月に1回以上ある。	献立は法人の管理栄養士がたて厨房で調理されているが、米を研ぐ・盛り付け・配下前は入居者が自発的に行っている。日曜日はおやつ作りを一緒に行ったり、月1回の行事食は入居者が包丁を扱って調理する。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量を記録している。水分不足にならないように声をかけたり、ゼリーを作ったり、市販の補水液を提供した。ご飯の量や水分の形態を個別に変えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自立でない方には職員が付き添っている。義歯は主に夜間に預かって洗浄している。自分で出来る方と、逆に拒否が多い方は、共に職員が介入出来にくいいため、口腔ケアが行き届いているとは言い難い。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンをつかんで誘導できるように取り組んでいる。トイレ内で介助が必要な方も、行為の一部でも自分で出来るように接している。現在、おむつ使用の方はいない。	リハビリパンツ・パットだった方が排泄状況を把握し排泄の自立ができ、布パンツ・パットになった事があった。半数くらいの方は自分でトイレに行かれ、紙おむつを使用している方はいない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の有無を記録している。全体では、水分の摂取と運動によって、特に便秘がちな方には個別にバナナ、ヤクルトを購入してもらったり、牛乳等を、好みや相性に合わせて提供している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本となる回数や曜日を本人の希望に基づいて設定し、その上で当日にも希望を伺い、急な入浴にも対応できるよう努めている。	毎日入浴を希望される入居者は日曜日以外は入っていたくよう等、希望に対応している。拒否のある入居者は言葉かけ・誘導に工夫して週に2回は入浴していただいている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や明るさ、その日の体調を考慮している。一度起きて眠剤を服用される方など、個別の希望にも対応して、安全に気持ちよく寝られるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容確認のため、情報を個人カルテに保管している。変更時は、診察内容の記録と実際の処方方を照らし合わせて確認している。特に飲み始めには症状の変化と副作用に注意して観察し、医療につないでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の家事の他、不定期だが生け花、園芸、歌や音楽を使ったレクを実施している。花壇の世話、詩吟、歌う事をプランに取り入れている方もある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や近所への買い物などは随時希望に沿えるよう努めている。また、予め希望を聞いて、調整の上で外出できるように対応している。付き添って下さるボランティアの方に協力してもらっている。	天候の良い時期は、毎日近所のコンビニエンスストアや100円ショップ・喫茶店に職員と一緒に出かけている。残してきた家を見たいと希望された入居者の家に職員と一緒に出かけたこともある。月に1~2回泊まりでご自宅の外泊をされる入居者もいる。お墓参りの希望は、家族に伝え行っていただけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	その方の能力に応じて職員が見守ってご自分で支払い出来るよう援助している他、本人の意思で少額の現金を自己管理されている方が数名ある。「お年玉を用意したい」と言う希望に対応した事もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	信書は本人に渡し、返事を出したいと言う方には、切手の購入、投函、代筆等の援助をしている。電話は時間帯、頻度にもよるが、希望をお聞きして対応している。以前は携帯電話をお持ちの方もあった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	整理整頓を心がけ、毎日掃除をしている。季節感を出す飾りを一緒に作って飾っている。天候や時間帯でカーテン、照明、室温を調整している。	壁には季節感のある作品が飾られている。食堂では入居者の好みに合わせたBGMを流している。食事時は、入居者の相性を考え座る位置が決まっているが、それ以外の時間は好きな場所に座っている。共用部分の掃除は入居者と一緒に行われている	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングダイニングの席は半固定で、入居者同士の相性に配慮し、希望も取り入れている。全員座る時以外は自由席で、気の合う方同士で話したり、ひとりで新聞を読んだりとおもいおもいに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具や作った作品などを自由に持ち込んで配置してもらっている。何も置かれぬ方もあるが、仏壇などを持ちこまれる方もある。	居室の掃除は自分でやっている。ベッドに慣れていない入居者は敷物の上に慣れた布団を敷いてもらっている。持ち込まれる飾りがなく殺風景な入居者は作った作品を飾って温かい雰囲気を出すように努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーで、廊下とトイレには手すりが備え付けてある。ゴミ箱、トイレなどには、一目で分かりやすいようなサインを貼っている。迷う方には居室が分かりやすいように目印(リボンなど)を付けている。		